

特別寄稿

松村松年先生小伝 最終回

昆虫ボランティア 久万田敏夫

ウスバキチョウなど大雪山高山昆虫の発見

現在国の天然記念物に指定されている「ウスバキチョウ」「アサヒヒョウモン」「タイセツタカネヒカゲ」などが大雪山から発見されたのは、今から70年ほど前である。1925(大正15)年に、当時北大の学生であった河野広道博士がアイヌ遺跡の発掘のため黒岳に登山した。もともと河野先生は松村先生の門下生で昆虫学を専攻しており、考古の発掘は考古学者であった父の依頼である。この調査の時に採取して持ち帰った昆虫の中にウスバキチョウなどが混じっていて、松村先生たちを驚嘆させたらしい。翌1926(昭和2)年夏に松村先生を中心に内田登一・河野広道両先生も同行して、大雪山で本格的な昆虫調査を実施した。この調査では高山帯で多数の昆虫類が採取され、その多くが低地では見られない新しい種類であったため、昆虫研究者ばかりでなく、一般の人々をも驚かす大ニュースとなった。この辺のことは白畑孝太郎氏が新昆虫3巻12号[1950(昭和25)年発行]に述べているが、発見当時の新聞報道も転載されており、いかに多くの人々が強い関心を示したかがうかがえる。その記事は次の見出しで始まっている。「北極や欧州の蝶を大雪山で発見、昆虫分布線を一変する北大松村博士の調査」。続いてその調査の成果が記されているが、かなり興奮気味の記事で、当時の驚きようがわかる内容である。この調査の結果は当時北大昆虫学教室から刊行され始めたばかりの「Insecta Matsumurana」に発表され、松村先生はチョウやガを含む鱗翅目を、内田登一先生はハチ類を、河野広道先生は甲虫類について、多くの新しい種類を記載した。今では「ウスバキチョウ」「アサヒヒョウモン」「タイセツタカネヒカゲ」は、「カラフルリジミ」や「ヒメチャマダラセセリ」とともに国の天然記念物に指定され、大切に保護されている。タイセツタカネヒカゲはその後日高山脈の幌尻岳などでも発見されたが、ウスバキチョウとアサヒヒョウモンは大雪山の高山帯以外からはまったく採集されてい

ない。その食草であるコマクサやキバナシャクナゲは他の山々の高山帯にも生育しているのに、そこにはこの高山蝶は生息していないのである。

多くの昆虫を研究してきた松村先生にとっても、これらの大雪山の蝶や蛾の発見は長い研究生活の有終の美を飾るのにふさわしい業績ではないだろうか。

エピローグ

このように書いてくると、先生の生き様は多感で負けず嫌いでもた夢多き子供の頃そのままの人生であったことがうかがえる。しかし松村先生は良くも悪くも、黎明期から今日へと、昆虫学を牽引してきた偉大な学者であったことは間違いない。

多感な先生の気質を表す事例の一つとして昆虫学とは全く関係のない有名な宗教論争がある。松村先生の次兄(松村介石)はキリスト教徒としてまた宗教学者として高名であった。先生もまたこの兄に従って16歳でキリスト教の洗礼を受けていた。しかし進化論が広まりキリスト教とは相いれない考え方が生物学の主流となるとともに、松村先生の考え方も変わっていったらしい。そこで1922(大正11)年に北海タイムス紙上で交わされた先生とキリスト教の牧師との一連の「科学と宗教の論争」は当時の一般読者の注目するところとなった。松村先生の主張は「キリスト教は地球の歴史や人間の起源については何事も説明していない」という一語に尽きるであろう。この主張に対して当然ながら宗教家側からの反発も大変なものだったらしい。この辺のところは松村先生の著書「科学者が投じたる宗教界への爆弾」や日本キリスト教会編「札幌北一条教会100年史」に詳しくのべられている。

先生は1934(昭和9)年に北大退職後に東京に転居され、1950(昭和25)年に日本学士院会員となり、1954(昭和29)年には文化功労賞を授与された。1960(昭和35)年11月7日に老衰のため逝去、享年

88 歳であった。

(この小伝の大部分は「松村松年自伝」造形美術協会出版局、昭和 35 年発行を参照した)



松村松年筆 「昆虫界は楽し」

左の揮毫はいつ書かれたものか正確には判らないのですが、松村先生が退官前の 1930(昭和 5)年頃に書かれたものではないかと思われます。当時昆虫学教室の先生や学生たちはよく定山溪などに蛾の採集に出かけていて、その頃に書かれたもう一幅の書があり、これもその頃ののものではないかと思われます。これらの揮毫は渡辺千尚先生が紙のまま保存されていて、それを久万田が預かっていました。久万田が退官時にそれらを諏訪先生に託し、諏訪先生が博物館館長になられたときに、さらに大原先生に渡されたものです。大原先生はそれらを額装に仕上げ、現在は博物館に保管されています。

(用紙の大きさは、66.5cm X 136.5cm)

活動報告・他

北大「大本營」昭和天皇の玉座を発見しました！

図書ボランティア 久末進一

北大が旧帝国大学だった昭和 11 年(1936 年)10 月、農学部の新校舎はそのまま丸ごと北海道陸軍特別大演習の「大本營行在所」となった。演習期間中(10月2日～5日)は「大本營」、演習終了後は「行在所」(10月6日以後)として 2 枚の門標看板が、歩哨の護る衛門に掛け替えて掲げられた。

また、記念事業で農学部へ直進する道路と構内を廻る塀を改築。併せてこの時に現在の正門が新設された。『御影石造りの正門は両側に傍門を持ち其総巾が約十二米、親柱の高さは四米五〇で傍柱は三米五〇、これに鐵扉がつけられて十五日頃には學の殿堂に適はしい堂々たる正門が出来上がる』(北海タイムス昭和 11 年 9 月 6 日付記事)との記述がある。

そして、嚴重な鉄條網と丸太造外柵をめぐらせた校舎(3 階建て)は全て道庁と宮内省軍部と警察関係者が占め、医局、薬局、厨房も設けられていた。

『天皇八陸海軍ヲ統帥ス』(大日本帝国憲法第 11 条)に定められた「統帥権」を握る「大元帥」でもあった昭和天皇は、最上階の校舎 3 階中央(時計塔下)講堂を「御座所」とし、「御寢室」を挟んで大演習を統監する「大元帥」としての「御統監室」が 1 つのフロアに 3 室続けて配置されていた。他の部屋は多くが天覧品と献上品の陳列室に割り当てられており、デス

モスチルス(北大の長尾巧博士が昭和 8 年に樺太で発掘)の骨格が、この時 9 月 15 日迄に天覧室で初めて組み立てられたのである。

なにしろ帝国の核として強権を担う「現人神」の昭和天皇を迎える大本營内の「御座所」には、関係各官庁が特に気を使ったところで、『昭和 11 年陸軍特別大演習並地方行幸』という同じ表題で刊行されている道庁側の記録誌(昭和 13 年 5 月 20 日刊)と、札幌市側の記念誌(同 14 年 12 月 27 日刊)には共に準備の苦勞がしのばれる。これを慮(おもんばか)ってか、宮内庁は「御座所」に配備すべき必要家具・調度品を「御貸下品」として貸与していた。それは次の通り。

『御脇卓 1 脚、同上用御卓被 1 枚、御小卓 1 脚、同上用御卓被 1 枚、御劍御帽掛 1 基、丸御卓 1 脚、同上用御卓被 1 枚、ソファー 2 脚、小卓子 3 脚、管内地図載台用卓被 1 枚、御卓上スタンド 1 基、同電鈴呼鈴 1 個、管内地図用スタンド 1 基、御敷物絨緞 2 枚』

道庁側記録誌挿入写真にこれらの品々は全て「御座所」内に配置されている状態が写っている。だが、最も大事な玉座の記載が無いのである。不思議なことに、「御座所」室内写真の方には玉座となる「御座椅子」と「御座机」が写っている。

この謎について、調査中に『玉座の御椅子・三度光栄の御用』（北海タイムス昭和 11 年 9 月 14 日付）の記事を発見した。

『(前略)当初宮内省よりご持参ある故、新調なき様の旨拝した由であるが、御椅子は先帝陛下(大正天皇)、皇太子殿下に在ませし御時、本道巡啓の際北大に行啓あらせられた御時(明治 44 年)と、聖上陛下(昭和天皇)が摂政宮殿下として北大行啓時(大正 11 年)御使用あらせられた御椅子が、北大に御保存申し上げてあるので、玉座には此御椅子の御使用を願うこととなり、同時に今回の光栄を記念すべく、北大当局では農学部講堂を聖跡として御座所を永久に保存し奉り、学生、生徒の教育の為に残し度き旨申し上げたところ、宮内省の御許を得た(略)』という記述から、特に玉座の「御座椅子」の由緒が判明した。大演習終了後、「大本營」は昭和 12 年 11 月 18 日付「大本營令」公示により、宮中設置に変わり、以後、「大本營発表」はまさに“天の声”と化し、昭和 13 年 4 月 1 日には「国家総動員法」が発令される。

そんな激動の戦時戦後の混乱の中で、この「御座椅子」の存在は忘れ去られた。

しかし、宮内省は貸与品以外は回収しないから、必ず椅子は現存するはずなので、北大の学内、学外の関係施設の調査を進めた。

その結果、大正、昭和両天皇の行在所となった経歴を持つ重要文化財施設「豊平館」(札幌市中島公園)を再調査し、明治 44 年行啓時資料として保存、展示されている椅子が、まさに行方を追跡していた北大「大本營行在所」の「御座椅子」であることを確認できた。

以下はその概要である。

明治期の洋風木製「肘掛椅子」(前幅 60 センチ、奥行き 60 センチ、高さ約 1 メートル)で、旧赤坂離宮(現迎賓館・東京)配置家具に共通するフランス新古典様式(ネオクラシズム)の意匠特色が見られる。

「平瀬標本」物語

北大総合博物館には約 1,500 種の「平瀬標本」があります。2010(平 22)年に、それらを整理し、リストの作成を終了しました。ここで、この標本にまつわる物語をしてみたいと思います。

最初に、「平瀬標本」とはどのような標本なのかを知るうえで手助けとなる文献(文献 1)の一節を紹介します。ちなみに、この論文は市立函館博物館の開館 100 周年を迎えた 1979(昭 54)年、博物館の記念

高級木材の素地ニス塗装仕上げで垂直背当て、肘掛け、腰掛けクッション部が真紅ビロード張り。特に背当て(縦 40 センチ、横 40 センチ)中央に金糸刺繍の 16 弁菊花紋章・16 葉 8 重表菊形(直径 10 センチ)が施され、玉座の証明になっている。侍従が背後から椅子の向きを変更できるように、背当てと支柱間に左右透かしがあり、椅子頭頃部には中央に金箔仕上げのアカンスとリーフ(葉)にひまわり模様の彫刻。曲線を描く肘掛け支柱から前脚膝部分までは溝彫りと金箔リーフ飾り彫刻があしらわれており、前脚のみキャスターが埋め込まれている。全体に威厳と高貴な華麗さを保ち、家具というよりは工芸品を思わせる美しい椅子であった。



札幌市「豊平館」所蔵の「御座椅子」

一方、この「御座椅子」のために用意された「御座机」は、「北海本板ベニヤ製造所」(札幌市豊平)が昭和 11 年 9 月に特別製作して献上したもので、椅子と同様、追跡調査を継続しているが、今もなお行方不明である。

これら天皇陛下の玉座は、北大ゆかりの資料であるばかりか、近現代史の物証として、文化財価値ははかり知れないものがある。

【資料提供】札幌市文化資料室

化石ボランティア 安田 正

事業の一つとして開始した、「市立函館博物館蔵品目録」の年次刊行計画の整理作業の成果の一環として報告されたものです。

「……旧蔵標本の中で注目されるものは、モース以降に岩川友太郎とともに我が国貝類学の発展に早くから貢献した平瀬與一郎の標本である。

平瀬與一郎は、1859(安政 6)年に兵庫県に生まれ、1887(明 20)年に京都へ移住した。京都に移って

から、貝類研究を自分の生涯の研究であると考え、以後全国の貝類を採取し数多くの新種を発見している。世界の研究者と標本の交換を行い、彼の自宅には様々な標本が収蔵されていた。これらの標本を広く公開すべく、我が国最初の貝類専門誌「貝類雑誌」を1907(明40)年に発行、さらに、独自で私設貝類博物館というべき「平瀬貝類館」(原文のまま)を1914(大2)年に京都に開館している。しかし、やはり私財を投じての開館であったため、6年後の1920(大8)年には惜しくも閉館された。ここに展示されていた標本について、船水清著「岩川友太郎伝」(岩川友太郎伝刊行会、1983(昭58))に、「その収蔵標本を帝室博物館およびワシントンの米国国立博物館に分割して寄贈し、残部は函館図書館標本室に保存された。」と記されている。この函館図書館標本室に置かれた平瀬與一郎標本が、前述したように、後に函館博物館に引き継がれているのは間違いないが、標本名、採取地、採取者、寄贈者を記した引き継ぎ書類は残されておらず、この標本もモースの標本と同様に特定することはできなかった。これは誠に残念なことである。

しかし、現在残っている旧蔵標本の中には、南の貝類が多数含まれている。おそらくこれらが平瀬標本ではないかと推測され、今後さらに当時の文書類を調査していくことであきらかにされるのではないかと思われる。

いずれにしても、貝類研究者から我が国の貝類研究に多大なる貢献をした人物として挙げられているのはモース、岩川友太郎、平瀬與一郎の3人であるが、この中から2人の標本が当館に残されているのはまさに驚くべき事実である。資料整理が終了した現在、これらの残されている旧蔵標本について調査を進め、我が国貝類学の基礎を築いた人物の標本を少しでも明らかにしていく必要があるだろう。」

少し引用が長くなりましたが、以上のように、「平瀬標本」とは平瀬與一郎個人によって収集・研究された日本の貝類の標本で、その研究成果とともに我が国の貝類学研究的の祖とされるものであり、世界的な評価を得ているものであります。平瀬與一郎は日本貝類学史における最重要人物の一人とされています。

ここで、平瀬與一郎の人となりおよびその研究活動について、他の文献(文献2および文献3)情報から補足してみます。

平瀬與一郎は、前記のように1859(安政6)年に兵庫県淡路島福良の庄屋の家に生まれました。平瀬家が京都に移ってからは、養鶏などの事業を営む裕福な家計でありましたが、与一郎自身は元来病弱の身で、専門の教育は受けずに家業に従事し、傍

ら、同志社の教師ゲンス(註1)に就き英語を学んでいました。元来、平瀬は淡路島福良の生まれでありますから貝類に関しては他よりも比較的興味を多く持っていた矢先に、ゲンスからいろいろ珍しい貝類の標本を見せられ、ますます興味の度合いを深めていったようです。その後ゲンスの紹介で、有名な貝類学者ギューリキ(註2)と相知ることとなって、遂にはその一生を比類稀なる貝類の研究に捧げることとなりました。



平瀬與一郎

(撮影時期は不明)

(フリー百科事典「ウィキペディア」から)

平瀬の貝類採取の範囲は、我が国4島はもとより、北は樺太、千島から南は小笠原島、硫黄島、琉球、台湾に及び、朝鮮、中国方面にも多少採取を試みたようです。所蔵の日本産貝類は3,000種に上り、そのうち、平瀬が発見した新種は約1,000種あります。また、平瀬が世界各国の学者と情報交換し、交換し合った外国産貝類の標本も約7,000種に達するとのことでした。

平瀬は28歳で一家とともに京都に移住し、その後貝類の採取と研究を始め、55歳で私設貝類博物館を開館、6年後、61歳で博物館の閉館を余儀なくされ、4年後、65歳で没しています。

平瀬は55歳で、私財を投じて念願の博物館、「平瀬介館」を設立、開館しましたが、その後の博物館運営、標本採取・研究活動の継続にはなお多大な費用を必要とし、それら費用の工面には相当苦労したようです。費用の一部でも得んがために貝類学の専門雑誌、入門書、解説書、図鑑等を著し、販売したほか採取した標本の一部で標本セットを作成し、それらを通信販売もしたようです。しかし、それら費用工面活動の甲斐もなく、博物館は閉館をよぎなくされました。博物館に展示、収蔵されていた標本は、前記のように「帝室博物館(現在の国立科学博物館?または国立京都博物館?)、ワシントンの米国国立博物館に分割寄贈され、残部は函館図書館標本室(後に函館市立博物館に引き継ぎ)に保存された。」とのことでした。

北大総合博物館が所蔵する「平瀬標本」は、どのような経緯で所蔵するにいたったのでしょうか?

1999(平11)年、北大総合博物館の設立に当たり、それまで研究者個人のもとに保管されていた学術標

本類が博物館のもとに一元的に集約されることとなりました。その作業の中で、平瀬標本は以前の北大教養部地学科の方から博物館に移管されたが、教養部ではどなたが保管していたものなのか不明であるとのことです(加藤、箕浦資料部研究員談)。教養部地学科には新生代の貝類化石の研究者が何人か居て、その研究者のどなたかが現生種貝類との比較研究のために保管していたと思われるが、当時の貝類化石の研究者の方々がすでに退職されており、確認するのも困難となってきた次第です。

函館市立博物館の平瀬標本は、平瀬博物館閉館後に寄贈されたとの記録はありますが、文献には「標本名、採取地などが不明であり、どれが平瀬標本か特定できない」とあります。そうであれば、標本のリスト、標本ラベルが最初から不備であったと思われる。一方、北大の平瀬標本には、すべてに、「京都 平瀬介館製」と印刷された専用のラベルが付されており、ラベルには、No.、学名、和名、産地の項目があり、それら項目は手書きで記入されており、平瀬標本であることは明確です。

この同じ平瀬標本の整備の差は为什么呢？北大の標本が、よりよく整備されていることを考えると、北大標本は平瀬博物館から通信販売等の手段で購入したものであることが推測されます。しかし、平瀬博物館が運営されていたのは1914年から1920年まで6年間、すなわち大正年間の初めであり、北大理学部は1930年、昭和5年です。従って、購入したとしても、どなたか個人あるいは組織、機関が購入したものを北大が再度購入したかあるいは寄贈を受けたのであると思われる。

このように、北大の平瀬標本の所蔵に至った経緯

北大チェンバロ～爽やかな夏の奏

こんにちは。北海道大学農学部2年、チェンバロボランティアの長竹新です。私がチェンバロというピアノのご先祖様に出会ったのは高校入学のときでした。丁度その年からできた部活で、その場の流れで何となく入部したのがきっかけで、今もチェンバロの伴奏にのせて歌とリコーダーでルネサンスやバロック音楽の演奏を続けています。

今年の夏は来るのが遅く(？、まだ東京から移って2年目、札幌の“普通”の夏がどのような物かまだつかめていませんが)、なんて快適なんだ！！と去年に増して感動していましたが、8月に入りいよいよ気温も湿度も高い日が増えてきました。私は、夜にエアコンが要らないだけまだだいぶ快適なのですが、

は不明ですが、それら貴重な標本が約1,500種とまとまって存在することは間違いありません。これらの標本が研究したいと思う者にとって、どのような標本がどこに収納されているかが容易に分かる、利用しやすいシステムが必要であろうと思われます。すなわち公開されたデータベースの構築が必要であると思われます。今後、専門家の監修を受けるなどして、データベースとして完成されることを望みます。(2011年3月31日記)

『引用・参考文献』

文献1:尾崎 渉「一市立博物館所蔵の貝類標本「高川コレクション」を中心として」「市立函館博物館研究紀要」(03号、2006(平18)年2月)「函館博物館会友の会」によってネット公開されている

文献2:「関西之実業」(荒川清澄編著 小谷書店1907(明40))

文献3:「普通貝類の栞」(平瀬與一郎編 平瀬介館1915(大3))

文献2、3は国立国会図書館デジタルアーカイブポータルでネット公開されている

註1:文献では「ゲンス」となっているが、アメリカ人宣教師で同志社の博物学教師、マーシャル・ゲインズ(Marshall R. Gaines)であろう

註2:アメリカ人宣教師で貝類研究家、ジョン・ギュリック(John T. Gulick)

(註、註2はフリー百科事典「ウィキペディア」による)

チェンバロボランティア 長竹 新

デリケートなチェンバロさんは湿度や気温の変化でご機嫌ナナメになりやすいです。



カルチャーナイトで筆者、長竹が Ombra mifu(ヘンデル作曲)を歌っている場面

さて、この7,8,9月はチェンバロボランティアが活躍するイベントがたて続けです。7月のカルチャーナイト、8月の時計台コンサート、そして9月のポプラチェンバロボランティア・コンサートです。7月15日に行われたカルチャーナイトには多くの方が来館され、また途中でチェンバロコンサートにて足を止めていかれ、本番は盛況でした。私たちがまた一人でも多くの方にこのポプラチェンバロの響きをそしてチェンバロが活躍した時代の音楽や雰囲気をお届けされたと、うれしさを実感しています。また今回はただいま開催中の「Lepidoptera 展」の中での演奏という事もあり、蝶にまつわる曲も織り交ぜました。色とりどりの翅に囲まれ、いつもとひと味違う空気の中で、私たちにとっても印象に残る演奏会となりました。

8月14日には札幌時計台でチェンバロ奏者の水永牧子(みづながまきこ)さんによる演奏会が開かれ、そこでチェンバロボランティアが話と演奏をしました。今回は「時計台の鐘 130年記念、クラーク博士来札・札幌農学校開校 135年記念」と題して演奏会が行われました。今回演奏される水永さんは農学校一期生の大島正健(おおしまさたけ)の玄孫(やしやご)だそうです。お盆という事もありクラーク博士をはじめ札幌農学校の先輩方も見に来られたのでしょうか。

9月4日は北大博物館にて「ポプラチェンバロ演奏会 Vol.11」が行われます。この演奏会ではフランスの歌曲をはじめとして、リコーダーやトランペットも参加します。チェンバロ演奏会では毎回チェンバログ

ループ以外の方にもご協力いただいております。また今回も大原先生をはじめ貴重な「Lepidoptera」の展示時の中での演奏会にご理解とご協力をいただいております。ありがとうございます。

北大を受験しようと決めたとき、博物館にチェンバロが置いてある事を知り、入学後すぐにボランティア登録をしました。このボランティアという機会を生き、このポプラチェンバロの事、この楽器が活躍した音楽・時代について何を伝えていこうか、どのような伝え方がいいのか、まだまだ勉強すべき事は山のようにあります。それでも少しでも良い形になるよう、同時にそれは自分にも良い形で帰ってくると思ひ、これからも活動していきたいです。



カルチャーナイト最後に出演者全員が挨拶をしている場面です

博物館訪問記

マイントピア別子(愛媛県新居浜市)

マイン(mine: 鉱山)とユートピア(utopia)でわかるように、かつての別子鉱山跡を野外博物館(地域博物館)とした産業遺産というべき施設です。

別子銅山は、金の佐渡金山や江戸時代の最盛期には世界の銀の30%を産出したといわれる銀の石見銀山(島根県、2007年に世界遺産に指定)とともに日本を代表する鉱山でした。元禄時代初期に発見され、1973年に閉山になるまで約280年間に銅鉱石を3,000万トン(銅量で70万トン)産出し、住友家(住友金属鉱山)のドル箱として、住友財閥の基礎を築いたと言われています。

別子銅山の鉱床は、四国を横断している三波川変

地学ボランティア 在田一則

成帯の中に位置し、変成岩の中に層状に産する銅を含む硫化鉄(黄鉄鉱や磁硫鉄鉱)からなる層状含銅硫化鉄鉱床(別名キースラーガー)と呼ばれるタイプです。もともとは海底火山活動に伴って出来る熱水鉱床の一種ですが、白亜紀(約1億年前)の変成作用(三波川変成作用)によって再結晶し、より高品位になっています。

マイントピア別子(ホームページは<http://www.besshi.com/>)は愛媛県新居浜市の国領川ぞいにあり、上流のマイントピア別子東平ゾーンと下流のマイントピア別子端出場ゾーンに分かれています。ともに公共交通手段はなく、東平ゾーンへは

松山自動車道の新居浜ICあるいはJR予讃線新居浜駅からともに約 18km、車で約 40 分です。端出場ゾーンは車で約 20 分です。

東平ゾーンは赤石山系の北斜面の標高 750m 前後の山中にあり、採鉱本部を中心にかつての鉱山関連施設や学校・病院・社宅・娯楽場などの生活施設が点在しています。ただし、施設は現在では撤去され、更地となっているところが多いです。それでも、石造りの貯鉱庫・電車が走っていた坑道やトンネル・山腹に掘られた火薬庫入口・赤レンガ作りの鉱山事務所や変電所などの遺構があり、かつての繁栄ぶりが偲べれます。山腹や山の上の平坦地は最盛期には 3,800 名もの鉱山関係者やその家族たちが働き、生活していたことを示し、東洋のマチュピチュとされています。まわりの景色や遺構にマッチしたデザインで新たに作られた東平歴史資料館では往時の住宅街のジオラマ展示や銅に関するテーマ展示室のほか赤石山系の自然を紹介する展示室もありま

す。

東平ゾーンは遺構が主体の野外博物館であるのに対して、下流の平地に近い端出場ゾーンは遺構の他に大きな端出場記念館があり、ここでは江戸時代や近代の別子銅山の採鉱の様子や観光坑道、別子鉱山の巨大ジオラマを見ることができます。

ところで、東平ゾーンの南東方の赤石山系を越えたところには旧別子銅山跡があり、そこにもより古い鉱山関係の遺構が残っています。元禄 4 年の別子開坑から 1916(大正 5)年まで鉱山稼行の中心である採鉱本部は赤石山系南側の旧別子銅山に置かれていました。1916 年に採鉱本部は北側の東平に移され、1930(昭和 5)年には東平からさらに北の端出場に移されました。キースラーガーの鉱脈は層をなして分布しているので、主要な採掘場は鉱脈を追って移動し、採鉱本部も移動したようです。それぞれにかつての遺構が残っているわけです。



鉱山施設跡地
現在は更地となっている



歴史資料館に展示されている往時の住宅街ジオラマ

事務局から

総合博物館ボランティアの会事務局の新体制

会長 在田一則

総合博物館ボランティア・ニュースNo.21(2011年6月1日)でお知らせいたしましたように、5月27日に行われたボランティアの会総会で、会員相互の情報交換の確実性と迅速性を増すために、事務局のメンバーを大幅に増やすこと(出来れば各グループから1名)を承認していただきました。また、それに伴って「事務局」を「グループ連絡会」と呼ぶことにいたしました。

グループ連絡会のメンバーは各グループの“代表”ではありません。各グループのメンバーからの推薦(グループの指導教員に推薦を依頼する場合があります)により会長からご本人にお願いし、承諾をいただければ、メンバーになっていただきます。

その方針により、現在のところグループ連絡会の構成は以下のようになっています。

在田一則(会長)・星野フサ(植物 G)・宮本昌子(昆虫 G)・西本結美(考古 G)・寺西辰郎(地学 G)・近

藤弘子(化石 G)・石川満寿夫(北大の歴史 G)・塚田則生(展示解説 G)・沼田勇美(遠友夜学校 G)・
長竹 新(チェンバロ G)・八木田道敏(図書 G)・安田 正(編集委員会)

メンバーの出ていないグループにもお願いしていきますが、グループ構成員が少ないなど各グループの事情がありましようから、無理にお願いすることはありません。

グループ連絡会の仕事は、ボランティアの会の活動内容を企画し実行することや各グループ間の情報交換を図ることなど、ボランティア相互の交流と親睦を高めるお手伝いをすることです。毎月第2・4金曜日の午後3階のボランティア控室(N302)で1時間以内を目処に行っていますので、メンバー以外の方もお気軽に参加ください。

なお、本誌「ボランティア・ニュース」はボランティア相互の交流と親睦を促進する大きな手段ですので、ボランティアの皆さまの積極的な投稿をお願い致します。

博物館推進員から

Lepidoptera 展フロア対応ご協力をお願い

北大総合博物館 研究支援推進員 河原法子・草嶋乃美

いつも大変お世話になって感謝致しております。

9月から展示解説スタッフが減り、展示室に誰もいない日やスタッフが1人だけの日が多くなって困っております。

ボランティアの皆様には、来館者に安全に観覧していただけるよう、フロア対応にご協力いただきたいと考えています。どうぞよろしくご協力ください。会期は10月2日まで、午前9:30～13:30、午後12:30～16:30のシフトになっています。これらのいずれかのシフトに対応いただける日にち(時間帯)を指定いただき、以下の連絡先にご連絡をください。どうぞよろしくご協力ください。

電話での連絡は、011-706-4704

メールでの連絡は、河原法子: n-kawahara@museum.hokudai.ac.jp または
草嶋乃美: n-kusajima@museum.hokudai.ac.jp です。

* 編集部からの嬉しいお知らせです

この度、石川満寿夫さんが編集委員に加わっていただけることになりました。心強い味方の応援をいただけることになりました。心より嬉しく思います。

石川さんは平成遠夕夜学校でもしばしば一緒しています。ボランティア・ニュースに原稿をお寄せいただいたこともあります。北大博物館ボランティアの会の活動の一部はボランティア・ニュースによって伝えられています。しかし、行き届かないところも多々あります。これを機会に、より良いニュースの作成に努力したいと思っております。(編集長委員長 星野)

* ニュース原稿の寄稿、また談話会、見学会などの企画に際して、皆様のご意見、アイデアお待ちしております。

* ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧いただけます。

<http://www.museum.hokudai.ac.jp>

* ボランティア控室が N302 から N314A に移動します。
時期は未定です。



ウスパキチョウ

ボランティア・ニュース

編集・発行
北海道大学総合博物館ボランティアの会
(担当者: 星野、沼田、永山、安田、石川)
発行日: 2011年 9月 1日
連絡先
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
Tel: 011-706-4706